

作物名：トマト

病害虫名：斑点病（病原：*Stemphylium lycopersici*、*Stemphylium solani*）

### 1 被害の特徴と診断のポイント

- 主に葉に発生するが、多発時には葉柄、茎、果実のへたにも発生する。
- 葉では下位葉から発生する。発生初期は小さな緑褐色で水浸状の斑点を生じ、症状が進むと拡大してまわりが黒褐色、中央が灰褐色でやや光沢のある2～3mm 円形病斑となる。病斑の周囲は黄変しており、さらに進展すると病斑の中心部に穴があく。
- 多発時には多数の病斑が生じ、それらが融合して大型の病斑となる。下位葉から黄化し枯死する。葉柄や茎にも病斑を生じる。
- 果実ではへたが赤褐色に変色して乾燥し、症状が進むと腐敗が内部へ進展し、離層部から落果することがある。
- 育苗期～収穫期の生育時期全般に発生がみられるが、気温がやや低く湿度の高い条件で発生が多くなる。
- 他の斑点性病害と比べて病斑は小さく、大型病斑に拡大することはまれである。
- 抵抗性を有する品種ではほとんど発病しないため、病徴と抵抗性の有無は診断の目安となる。



写真1 葉表の病徴

### 2 伝染源・伝染方法

- 被害葉上で菌糸や分生子の形で越冬し、伝染源となる。
- 罹病葉の病斑上に形成された分生子が、風によって空気中に飛散して伝染する。
- 葉面に付着した分生子は、結露水等の水分によって発芽し、葉の組織内に侵入する。

### 3 発病しやすい条件

- 本病菌は、糸状菌の一種で不完全菌類に分類され、分生子を形成する。
- 菌の生育適温は25℃前後で、発病好適条件は20～25℃の気温と多湿である。
- 気温15～35℃では、葉の濡れ時間が6時間以上で感染、発病する。
- 施設栽培で発生しやすい。

### 4 防除方法

- 抵抗性、耐病性の品種を作付けする。
- 抵抗性等のない品種を栽培している場合は、発生初期に薬剤防除を行う。
- 被害葉等は伝染源となるので、ハウス内に放置せず持ち出して処分する。
- 施設栽培では、気温較差の大きくなる秋期には換気を行い除湿に努める。
- 肥料切れは発生を助長するので、適切な肥培管理に努める。

### 5 出典

#### (1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編2-①（農文協）
- 農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）

#### (2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 初期病斑



写真3 斑点病菌の分生子

(令和5年9月改訂)